

長崎県立鹿町工業高等学校 創立記念日

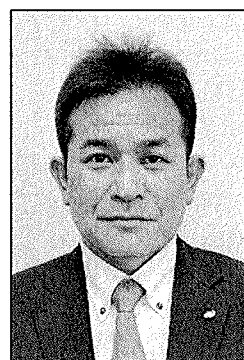
かたつむり

令和7年5月22日（創立63周年）

「歴史と伝統を未来へつなぐ」

校長 松尾 善久

本校は、高度経済成長期の昭和37年（1962年）に3学科2クラス・計6クラスの272名で産声を上げました。当時の北松地区の産業界は、エネルギー革命による炭鉱閉山の影響を受けて厳しい状況でしたが、石炭産業に代わる地域産業を担う人材育成を目指して、地域の熱い期待を背負いスタートしました。開校後、4学科2クラスとなり昭和41年から昭和55年にかけては、毎年300名にも及ぶ卒業生を社会に送り出すなど、これまでに多くの優秀な人材を輩出してきました。



卒業生は、それぞれの分野で活躍されており、その数は1万5千名を超えます。そして、本校で培った知識や技術、精神力を活かし、地元長崎をはじめ、全国各地で社会の発展に大きく貢献されています。

現在は、「われ共に学びて 道を究めん」の校訓のもと、機械科、電気科、電子工学科、土木技術科の4つの専門学科を擁し、これからの地域社会の発展と地域産業を支える人材育成に力を注いでいます。

また近年では、ドローン教育といった新たな分野にも積極的に挑戦し、社会環境の加速度的な変化に対応するための教育環境整備に取り組んでいます。

この他にも『アサカツ』や『鹿工訓練』といった本校独自の取り組みを通して、社会人として必要な基礎学力や行動力・実践力を養い、人間力を高め、高い就職率・進路決定率を維持しています。

在校生の皆さん、毎年5月22日の創立記念日には、本校の歴史を振り返り、社会情勢や地域の状況の変遷を知ること、今後の道標を見つけるきっかけとしてほしいと思います。

鹿町工業高校の歴史と伝統を受け継ぎ、更なる発展を築いていくのは、皆さんの熱意と努力です。校訓にあるように、仲間と共に学び、それぞれの専門分野を深く探求し、技術と知識を磨き、社会に貢献できる人材へと成長してください。困難に立ち向かう勇気と、常に新しいことに挑戦する精神を養い、未来を切り拓いてください。

今年度の学校スローガンは「行動改革」です。

本校の歴史を学び、これまでの自分の軌跡を振り返り、今後の高校生活と卒業後の人生をどのように過ごしていくか、この機会にもう一度考えてください。

目標を確認したら、すぐに行動し「鹿道」を究めるべく、いろんな目標にチャレンジしてください。その先には、必ず明るい未来が待っています。

これからの人生で、一人一人が大きな輝きを放つことを期待しています。

◇◇ 今年度着任された教頭先生、事務長先生、また、国語科の濱田先生から
在校生の皆さんにメッセージをいただきました。◇◇

「われ共に学びて道を究めん」

教頭 竹内 健太郎

私は、以前10年間鹿工で勤務し、8年ぶりに再び鹿工に赴任してまいりました。これまでの1ヶ月間、感動したことがありました。

先日、長崎国際テレビ「働くバイモノづくり宣言!」という番組の取材があり、機械科3年生を中心に番組スタッフをご案内しました。まず、圧巻だったのは「鹿工訓練」です。一糸乱れぬ行動、指差呼称、挨拶訓練の一体感にクラスの団結力を感じました。旋盤の実演や、番組スタッフからの急な溶接のリクエストも余裕でこなし、これまでの鍛錬を感じました。VR体験や、3Dプリンタ実演、ドローン実習など、最新技術を学ぶ姿を見ることができました。そして、なにより、機械科3年O君が、インタビューで将来の夢を問われたとき、「溶接関係の仕事に就いて、人の役に立つ仕事をしたい」と答えたことに、とても感激しました。

歓迎遠足の時の話です。ある生徒と話しながら歩きました。私がクラスについて尋ねたところ、「クラスメイトは個性豊かで、それぞれ考え方に違いがあり、学びがある」と答えてくれました。多様性を認め、多くの人から学びを得ようとする姿勢に感動しました。

このような姿から、鹿工を離れていた8年間変わらず、先生方と生徒の皆さんが一つになって、自らを高め、社会に貢献できる技術者を目指して取り組んできたことを感じます。今後も、校訓「われ共に学びて道を究めん」の精神のもと、仲間を大切に、日々成長していきましょう。

「鹿道をウェルビーイングで」

事務長 下迫 興三

前任校は壱岐商業、前々任校は佐世保工業、その前は鹿町工業で勤務しており、8年振りの鹿工勤務です。とても懐かしく思いながら、また、鹿工のために何ができるかということを考えながら、日々仕事に向かっているところです。

さて、皆さんはウェルビーイングという言葉聞いたことがあるでしょうか。英語で「Well-being」と書きます。直訳すると「良く在る」ということになります。

「良く在る」といってもピンとこないかも知れませんが、鹿工のことを考えてみてください。各科の実習では、溶接や切削、電気工事や電力技術、プログラミングや電子制御、コンクリート製作や測量などに取り組み、社会基盤が「良く在る」ためのものづくりをしている学校です。

ものづくりだけではなく、生徒の皆さんにもあてはまります。学校の授業や行事、部活動や寮生活などを通して、自分が「良く在る」ための色々な経験ができるところです。「良く在る」ことは、自分も幸せであり、相手も幸せである、という状態につながります。

幸せになり、新たなことに取り組み、さらに良く在るというサイクルを目指して学校生活を送ってください。

さあ、創立記念日です。先輩方がどのような学校生活を送っていたのか、鹿工の伝統に思いを馳せて、皆さんの「鹿道」をウェルビーイングで歩んでいきましょう。

『鹿工生よ「守破離（しゅ・は・り）」をもって、
生涯にわたり道を究めるチャレンジを！』

国語科 濱田 猛

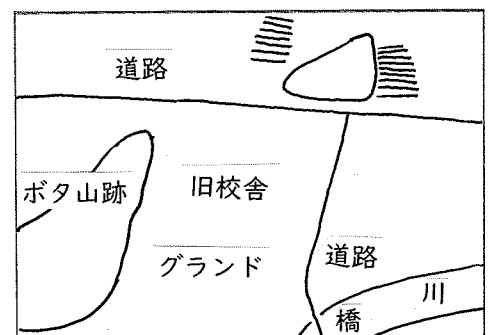
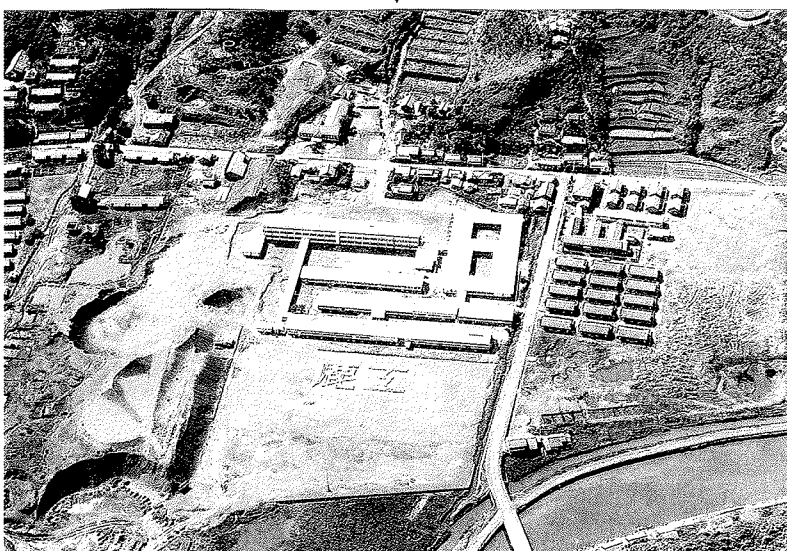
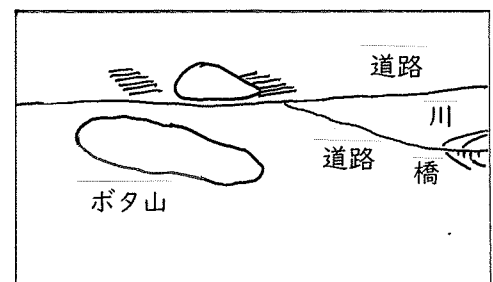
「守破離」諸説ありますが、千利休のことはまとめた書物の中に「作法を守り尽くして破るとも離るととても本をわするな」を引用したものとされています。

修業においては、師匠から教わったことを徹底して「守る」ところから始まり、鍛錬を積み他流派の型も含め自分と照らし合わせて研究することで、すでにある型を「破る」ことができるようになる。さらに鍛錬を積んでかつて教わった師匠の型と自分で見いだした型両方に精通した者は既存の型にとらわれることなく「離れ」て自在となることができる。

このようにして新たなものが生まれるのである。（参考・ウィキペディア）

さて、鹿工で学んでいる諸君は今、「守」の段階にいてのではないのでしょうか。新しい分野を一から学んで、それを活かし進路決定を行い、様々な分野で技術立国日本を支えていこうとしている光なのです。今は小さい光かも知れませんが、将来にわたり強く、遠くを照らす光を発するよう、「自分の原点は鹿工だ。」といつか振り返ることができるよう、鹿工での今日という一日を全力で過ごしていきましょう。

◇◇ 校舎が建っている土地は炭坑の跡地（上の写真）で、今の校舎は
旧校舎（下の写真）を建て替え、平成12年に完成した新校舎です。 ◇◇



※ 今の校舎は、建物とグラウンド
との位置が逆になっています。

◇◇ 旧校舎が今の校舎に建て替わった2年後に創立40周年を迎えました。記念誌に
お寄せいただいた温かいメッセージの中から3名の方のメッセージを紹介します。◇◇

「創立当時の通学は大半の生徒が鉄道で、炭坑の名残のボタ山などを車窓に見ながらの、力強さを感じる汽車でした。車中はいつも満員で雑談が多いが、試験期間になると静かにノートを見る目は真剣で、若者の無限の可能性を感じ、私も気持ちが高揚し楽しく通勤をいたしました。新しい校舎になり寂しい感じもありますが、鹿町工業の発展をお祈りいたします。」(旧職員)

「鹿工の近くに店を構えて早40数年、改めて月日の流れを感じます。炭坑の跡に工業高校が設置され、鹿町町の発展に寄与していることに対し、町民として嬉しい限りです。2年前には新しい近代的な校舎ができ、それは目を見張る設備です。このような環境で勉強される生徒さんは幸せです。外観に負けないよう、勉強、クラブ活動に頑張ってください。」(近隣商店)

「私が鹿工の寮に勤めさせていただいて何百人という生徒さんと出会いましたが、はじめは親元を離れた子どもさんとうどう接したらよいのか不安でした。あれから数十年、私自身いろんな事がありました。夫の死など悲しい出来事に直面したときには、先生方、寮生の皆様の温かい励ましに勇気づけられ、感謝しております。これからも鹿工寮の発展のために及ばずながら力になっていきたいと思ひます。」(寮母)



<SL通学>



<学校側から江迎方面を望む>

<編集後記>

松尾校長先生をはじめ、ご寄稿賜りました皆様には、ご多用の中ご対応いただき感謝申し上げます。

さて、鹿工の創立当時、戦後の高度経済成長を支えた「金の卵」と呼ばれた若者たちは、中学、高校を卒業して集団就職用の列車で地方から都市部へと向かいました。国鉄「佐世保駅」でも、地元を離れる高校生たちが友人や家族に見送られながら大きな荷物を持って急行「平戸号」で都会へと旅立ちました。

今のように都会から数時間で故郷に帰るなどということはできず、通信も不便な時代、誰もが大きな寂寥感を抱いたことと思います。「高校を卒業して上京、故郷恋しさのあまり、故郷の言葉を拾いに上野駅を歩くこともありました。」という新聞投稿を目にしたこともあります。

「ふるさとの ^{なまり}訛 ^{ていしやば}なつかし 停車場の

人ごみの中に そを聴きに行く」 (石川啄木)

創立から63年、文明の進歩は距離感を縮めました。しかし、人が故郷を思う心、人が人を思う心そのものに変化はなく、前述の旧職員、近隣商店、寮母の方々のような鹿工生に対する期待や愛情もまた、変わることなく関係の皆様のお気持ちだと思ひます。

そのお気持ちにこたえようとする姿勢が、常に私たちには求められているのだと思ひます。

<佐世保駅に設置された年表より>

1963	1962	1961
S 38	S 37	S 36
6 / 1	8 / 1	4 / 15
長崎線、佐世保線、大村線気動車化	準急DC「九十九島号」佐世保〜博多間松浦線	急行「平戸号」大阪行きとして運転開始
		中佐世保駅開業
		天皇、皇后両陛下ご巡幸、佐世保駅にご降車